

愛隣幼稚園

園だより

08.11月号

幼稚園と民主主義

11月を迎えます。ヒラリーかオバマかの騒ぎで始まったアメリカ大統領選挙がいよいよ終決します。私たちの国でも、代議士のセンセイたちは11月30日総選挙に向けて走り出してしまっているようです。なにかと選挙が話題になる1か月を過ごすことになりそうです。小泉さんの郵政民営化踏み絵選挙以来、居座り政権が続く我が国です。未曾有の経済危機ではあるけれど、早く選挙をしていただくほうがいい。選挙は民主主義政治の神髄をなすものだからです。

さて、政治の話はさておき、幼児教育と民主主義はとても深い関係にあると筆者は考えています。幼児教育の目指すところは二つであって、そのひとつは民主的な人格作りであり、もうひとつは民主的な社会作りである。これが筆者の持論なのです。

民主的な世界人格にはマタマタ二つの柱があります。第1の柱は確かな自己肯定感であり、第2の柱は他者の存在の尊重です。第1の柱の「自己肯定感」とは、周りからどう見られようと、周りから何と言われようと、しっかりと自分の考えを持ち、揺るがずに自分の考えるところを行うことのできる人格です。第2の柱である「他者の尊重」とは、自分と違っている隣の人を受け入れることです。しかもその違いを自分にとって大切なものとして尊重するのです。その「違い」が世の中の目からは「低劣」とか「貧弱」とか見られるものであっても、それを尊重するのであって憐れむものではありません。私たちは子どもたち一人ひとりに「君は君でいい」と言ってあげねばなりません。それによって自己肯定感に裏打ちされた人格を育てることができるからです。また「仲間と一緒に素晴らしい」と伝えねばなりません。そこで子どもたちは自分と違う他者と出合い、その違いからたくさん学び、その存在の大切さを体験することになるからです。

幼児教育の目的のもう一つは民主的な社会作りであると言いました。これは将来どこかに民主的な社会を作るということではありません。今、今日のことです。またどこか遠くにはありません。この場の幼稚園の生活そのものです。幼稚園の毎日の生活を民主的な世界実現の場とするのです。

民主主義の反対は独裁主義・全体主義です。教師が独裁者になってはならないのです。子どもは教師の意のままに動くロボットではありません。子どもを自分の意のままに動かそうとするのは独裁者への誘惑です。子どもが自分の意のようにはならないという「違い」に、教師自身が出会い、それに取り組むのが保育という仕事です。先生も他社の違いを尊重する民主的な人格に近づくように鍛えられていくのです。こうして教師たちも子どもたちも、共に民主的な世界を作り出す一員になるのです。

全体主義のもとでは一人ひとりの自由が奪われ、全体の方向に無理やり従わされます。そこには自己肯定感も、多様な違いの尊重もなく、ただ皆と同じであることだけが生き残る道なのです。私たちは幼稚園というところをしばしば「みんなと同じようにできる子にする」ところと思いがちです。でも私たちの目の前に繰り広げられる光景は「一人ひとりみんな違う」です。そして違っている皆が集まることで生み出される素晴らしい世界です。これが「民主的な社会」です。

愛隣幼稚園の11月は、子どもたちの遊びが発展し、その楽しさを分けあい、もらいあう月です。一人ひとりの違いがその子満足につながり、周りの子に良いものをもたらし、幼稚園中が楽しさを満喫することになるのです。ここに「民主的な世界」の花が開きます。